
Fate/Zero 人類最古の王唯一の『友』

案道名津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Zero 人類最古の王唯一の『友』

【Nコード】

N0405Z

【作者名】

案道名津

【あらすじ】

第四次聖杯戦争。

ウェイバー・ベルベットは魔術師を見返すために、聖杯戦争への参加を決める。征服王を召喚するはずだった彼だが、運命の歯車は狂い、彼が召喚したのは 簡素な服装に、男とも女とも取れる淡い緑色の長髪をした、中性的な風貌の人物だった。

はじめに

おひさしぶりです。

といっても、知ってる人は少ないでしょうが……

今年の夏まで恋姫小説を書いていたのですが、自分の未熟さにうんざりし、見つめなおしていました。

恋姫のほうはプロット作成段階で全然進みません。

ということでも一年ほど前に考えた『Fate/Zero』の二次創作を練習として投稿し始めることにしました。

投稿に至った理由ですが、Zeroのアニメが始まったことです。

忙しくてまだ三話しか見てないのですが、あまりのクオリティに驚いて、久々にはまりました。

そして思い出しました。あ、そういえば前に書いたやつあったなと。

この作品は初の三人称を練習しているので、

変な文章があるとおもいますが、ま、下手だなと思いつながら見てください（笑）

そしてやはり難しい型月作品。

ご都合主義、独自解釈があります。

サーヴァントもライダーが征服王イスカンダルではありません。

ウェイバーとイスカンダルが好きの方は見ないことをお勧めします。

サーヴァントはオリジナル設定にFate/strange fakeの設定を混ぜ合わせています。

ライダーが結構な最強キャラになりますので、チートが好きなお人も見ないことをお勧めします。

タイトルの最古の王とはあまり関わらない可能性があります。

また、多くのキャラがキャラ崩壊、え、これ誰wという状況になっている可能性があるので、御覧になる際はそこの部分をご了承ください

さい。あくまで自分の思ったように執筆します。

投稿に関してですが、日常生活が忙しいので、
二週間に一回、最悪一月に一回のペースになるかと思えます。

ウェイバー・ベルベットの才能は誰にも理解されなかった。

魔術師として、さして名のある家門の出自でもなく、優秀な師に恵まれたわけでもない少年が、

なかば独学で修行を重ね、ついには全世界の魔術師を束ねる魔術協会の総本部、

通称を『時計塔』の名で知られるロンドンの最高学府に招聘されるまでに到ったという偉業を、

ウェイバーは何人たりとも及ばぬ栄光であると信じて疑わなかったし、

そんな自分の才能を人一倍に誇っていた。

しかし『時計台』での評価はひどいものだった。別に彼の成績が悪いわけではない。

それはすべて魔術師としての歴史にかかわるのだ。魔術師をして最も価値のある財産である魔術回路と魔術刻印。

彼の家系はまだ三代しか積み重ねていない。それは彼もわかってい

る。だからこそ彼は魔術師としての今までの価値観を否定し、努力することにより得たものを認める論文を作った。

彼は努力し、自身に才能が付いたと自信を持っていた。

しかし、それは周囲から見たら粗末なものだった。

そうとは知らず、彼は論文を名門であるアーチボルト家の嫡男、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトに提出した。

そしてほどなくして彼の期待は打ち破られた。

ケイネスは、ウェイバーの論文をあつさりと破り捨て、ウェイバーに注意をしたのである。

一般的に見ればケイネスの行動、言動はほめられたものではないだ

ろう。

しかし、時計塔は一般的ではなかった。

権力、財力、魔術師としての力すべてがウェイバーの上に行くケイネスは非難されることなどありえないのだ。

ウェイバーはケイネスのその行為、その態度を許すことはできなかった。

そしていつか魔術協会に自分が正しいことを認めさせてやると誓った。

が、意気込んだは良いが、肝心の手段が一向に思い浮かばなかった。しかし、ある日であるケイネスがとある儀式に参加することを知らる。

聖杯戦争。

参加者である七人の魔術師はマスターが各々一騎の英霊を己のサーヴァントとして召喚し、

あらゆる願いと望みを叶える願望機である聖杯を得るため、七組のマスターとサーヴァントが最後の一組となるまで戦い抜き、殺し合う。

聖杯戦争の詳細を知ったウェイバーはこの儀式を、千載一遇の好機だと考える。

そして時を置かずにウェイバーにとって幸運なことが起こった。

ケイネスに届くはずだった英霊召喚のための触媒をウェイバーが手に入れた。

触媒は偉大な英雄が生前用いていた外套の切れ端であった。この触媒で召喚される英霊は一人しかない。

征服王イスカンドルである。

ウェイバーは歓喜していた。これが、この英霊がサーヴァントとなれば、優勝も夢ではないと。

しかし、事はそうも簡単にいかなかったのである。

「ああ……ちくしょうっ、なんでこうなるんだよっ！」

ウェイバーはひたすら地面に拳を殴りつけていた。

聖杯戦争に参加を決意したウェイバーは日本の冬木市に入り、令呪を手に入れた。

そして今日、最強のサーヴァントを召喚するべく、冬木市深山町の某雑木林の奥で、英霊召喚を行おうとしていた。

もちろん、そこには触媒となる外套の切れ端を持ってきていた。

しかし、風が強かったのが不幸となってしまうた。

質量の軽い外套は風に飛ばされてしまったのだ。それを最初は追ったものの、

追っているうちに見失ってしまい、現在に至る。

とりあえず、元いた場所に戻ってきたが、触媒はなく、鶏三羽の血で描かれた魔法陣だけが寂しく存在していた。

この時、すでにウェイバー・ベルベットには怒りはなく絶望と恐怖が襲っていた。

英霊を召喚する触媒をあっさりと自分のミスで失った現状、この状況で聖杯戦争を勝ち抜くのは困難である。

すでにマスターとして令呪を持った以上、他の参加者に狙われることとなる。

ウェイバーの人生においてケイネスに馬鹿にされた以上に最悪の状態になっていた。

「なんでっ……こんな……僕がなにをしたっていうんだっ！、くっ
そお！！！」

涙を流す。

地面を殴りつけていた拳からはうっすらと血が出ている。

拳から伝わる痛みで次第に落ち着いたが、絶望的な状況が変わったわけではない。

ウェイバーとしてとれる選択は二つ。逃げるか英霊を召喚するか。しかし、逃げることは困難だ。すでにマスターとしてばれている可能性は大いにあるし、ケイネスの触媒を盗んだことで恨まれているはずだ。

ここで逃げるという選択肢は取れない。

それならば、ひとつしかない。しかし、それはウェイバーにとって吉と出るか凶と出るか。

「死にたくない。……僕は……いや、僕ならできる」

彼は決意を決めた。

彼を後押ししたのはプライドだろう。この召喚が成功し、もし聖杯戦争で生き残れば、自分を見下した奴らを見返すことができる。

だから選んだ。それは彼に残った最後の意地だった。

「やってやるよ……」

ウェイバーはこの絶望的な状況において、戦う道を選択した。

ウェイバーの眼前には、簡素な服装に、男とも女とも取れる淡い緑色の長髪をした、中性的で

柔らかな風貌で、その精緻さは人間というより人形のように思わせる人物がまたも中性的な声で言葉をかけたきた。

ACT01（後書き）

短い…そして早速ご都合主義。

触媒無くすとかありえないでしょ……

ま、自分の想像力なんてこんなもんですよ（笑）

それとZeroのキャラで好きなのはイスカンドル・ウェイバーちやん。

自分でコンビ消しといてなんですが、このコンビ本当に好きです。

あとはケイネスですね。彼はなんだかんだ好きです。

Staynightだと私はイリヤと桜とキヤスターが好きです。書くならこの3人ヒロインで決定

P.S.

雁夜おじさん頑張ってね……

ACT 02

ウェイバーは結果として触媒なしでサーヴァントの召喚に成功した。暴風で吹き飛ばされる中、確かにこの世のものとは思えない気配。英霊の気配をかんじた。

そして結果見事、英霊を召喚した。それはウェイバーの自信をより強めたのだった。

成功したことによる高揚感で触媒を失ったことなどの焦り、絶望感
は薄れていた。

しかし、サーヴァントの姿は彼を裏切った。

サーヴァントは男とも女とも取れる淡い緑色の長髪をした、中性的な顔立ち。声も中性的で、身長も女性にしては高いが

自分より大きいにしても男性としては低い部類に入る身長なのだ。もっと自身の召喚する英霊は存在感が大きく、頼れる存在というのが、彼が期待していた英霊だった。

おそらく、征服王を召喚するつもりだった彼はその存在が大きいと心のどこかで思っていたこともあるのだろう。

ウェイバーが啞然としてみると、サーヴァントが歩み寄ってきて顔を覗いた。

その瞬間彼の顔とサーヴァントの顔はかなり近づいた。

「わ、うわあっ」

ウェイバーは綺麗な顔が近くに来て驚いて情けない声を出して顔を真っ赤にして倒れてこんでしまった。

「うん？ごめん。驚かしちゃった？…ところで、君が僕のマスターでいいのかな？」

「そ　そう！　ぼぼボクが、いやワタシが！
オマエのマスターの、ウ、ウェイバー・ベルベットです！
いや、なのだッ！　マスターなんだってばッ！！」

何かもう色々な意味で駄目で、マスターとしての威厳のご皆無であるが

ともかくウェイバーは精一杯の虚勢を張って目の前のサーヴァントに対抗した。

それを見て、サーヴァントは微笑む。

「ふふっじゃあ、契約完了だね。サーヴァントライダー。

僕の方でマスターウェイバー・ベルベットを守ってあげよう」

その微笑みにウェイバーはドキッとする。

そこでウェイバーは気になっていたことを聞いてみることにした。

「な、なあ。ところで、ライダーは、女なのか？男なのか？」

大変失礼な質問になってしまいが、ウェイバーにとっては大切なことなので、聞いておくことにした。

「僕？男だけど…女でもある、かな」

なんとも不可解な回答である。

男だけど、女…ウェイバーが導き出した答えは、オカマである。

しかし、オカマの英霊なんて聞いたことがない。

というか考えたくもない。

目の前のサーヴァントが女性で実は男性でしたって言われたら、

それはまあ仕方ない気もするのだが。

とりあえず、ウェイバーにはこのサーヴァントの真名が皆目見当もつかなかった。

「ラ、ライダーお前の真名は？」

「ちよつとまって。…うん。周りには誰もいない。…僕の真名はエルキドゥ」

真名を聞いたときウェイバーは驚きを通り越して啞然とした。

エルキドゥ。最古の英雄王の唯一の親友。

英霊というよりは神霊寄りな存在。

なるほど、女神の泥から出来たかのものなら女、男それぞれであるともいえるかもしれない。

ともかく自分は最高のサーヴァントを呼び出すことに成功した。そのことにウェイバーは喜びを隠しきれず、顔をにやけさせた。

ウェイバーはライダーのステータスを見る。

【クラス】ライダー

【マスター】ウェイバー・ベルベット

【真名】エルキドゥ

【性別】不明・男

【身長・体重】167cm 54kg

【属性】混沌・善

【筋力】

B

【魔力】

B

【耐久】

C

【幸運】

D

【敏捷】

A

【宝具】

-

【クラス別能力】

対魔力：B

騎乗：A+

【保有スキル】

気配感知：A+

勇猛：A

単独行動：A+

怪力：B

言語理解：B

神性：C

魔術：C

召喚：C -

驚くのがこのスキルの量である。

魔術師として血の浅い彼には嬉しいのが単独行動A+のスキル。

とにかくこれは間違いなく最高である。しかし、宝具のランクがわからないのは不可解である。

まさか、宝具を持っていないなんてあるまい。

それを聞こうとすると、

「さて、真名も明かしたことだしそろそろマスターの拠点へ移ろう。
ここじゃ寒いしね」

ライダーがウェイバーに提案してきた。

「わかった。あ、でも霊体化しといてくれよ」

「わかったよ」

そう言ってライダーは姿を消した。
宝具のことはまた後で聞こうと思う。

ACT02 (後書き)

ライダーの正体はエルキドゥでしたー

といってもタグで気付いた人もいるかと思いますが。

それと短いのは本当はACT01と02はひとつだったんですね。
でも、見直ししてたらいつの間にか分かってました(笑)
というわけでACT03は少しは長いです。

P.S.

サーヴァントの設定はACT03を投稿してからにします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0405z/>

Fate/Zero 人類最古の王唯一の『友』

2011年12月3日02時55分発行